研究ノート

シベリウス作曲のピアノ曲《即興曲》Op.5より第２番の楽曲分析

―転調と和声の変化に焦点をあてて―

Analysis of the piano piece Impromptu Op.5 No.2 composed by Sibelius
― Focusing on modulations and harmony changes ―

夏目佳子*
Yoshiko NATSUME

キーワード：楽曲分析、転調、和声
Key Words：Analysis, Modulation, Harmony

要約

本研究は、フィンランドの作曲家シベリウスのピアノ曲《即興曲》Op.5の第２番の転調と和声の変化に焦点をあて、シベリウスの本ピアノ曲の作品の特徴を明らかにする。分析の結果、シベリウスが《即興曲》Op.5の第２番で使用しているコードはシンプルであるが、旋法を使用し、半拍遅れの保続音を使用することで独特の雰囲気を形作っていることが明らかになった。

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the characteristics of the piano piece *Impromptu* Op.5 No.2 composed by Sibelius, focusing on modulations and harmony changes. Analyzing structures and melodies of the piece, the musical characteristics of the piece were revealed as follows:

1. Chords in the piano piece *Impromptu* Op.5 No.2 composed by Sibelius were simple.
2. Unique musical expression was made by using mode and eight note delay sustained tones.

＊東海学園大学教育学部教育学科

1．はじめに

本研究は、フィンランドの作曲家 Jean Sibelius（以下、シベリウスと記す）のピアノ曲を楽曲分析することで、シベリウスの音楽の特徴を明らかにするものである。楽曲分析においては転調と和声の変化に焦点をあて分析を行い、更にシベリウスの音楽の響きや音の並び方を分析することで、シベリウスのこの楽曲の特徴を明らかにしたい。本研究で楽曲分析するピアノ曲は、シベリウス作曲のピアノ曲《即興曲》Op.5 の第２番である。楽曲分析を行い、シベリウスの音楽の特徴を理解することで、ピアノで演奏する際の表現力を更に広げていくことが可能となるであろう。

シベリウス（1862-1957）は、後期ロマン派から近代にかけて活躍したフィンランドを代表する作曲家である。交響詩《フィンランディア》、交響詩《タピオラ》、《交響曲第２番》など、有名な楽曲を作曲している。

シベリウスの楽曲の分析は、《交響曲第３番》については、神部（2008）によってすでに行われている。しかし、本研究で取り上げるピアノ曲《即興曲》Op.5 の第２番についての楽曲分析はこれまでに行われていない。

シベリウスの音楽には、独特の雰囲気があるように感じる。それを明らかにするために、《即興曲》Op.5 の第２番についての楽曲分析を行う。

2．分析の方法

分析する楽曲は、シベリウス作曲のピアノ曲《即興曲》Op.5 の第２番である。分析に使用する楽譜は、FAZER 版である。

楽曲分析においては、転調に着目しながら和声の流れを明らかにする。また、楽曲の中のシベリウスに特徴的な部分に着目し、音の響きや音の並び方を分析する。これらの分析により、この楽曲のシベリウスの音楽らしさを明らかにする。

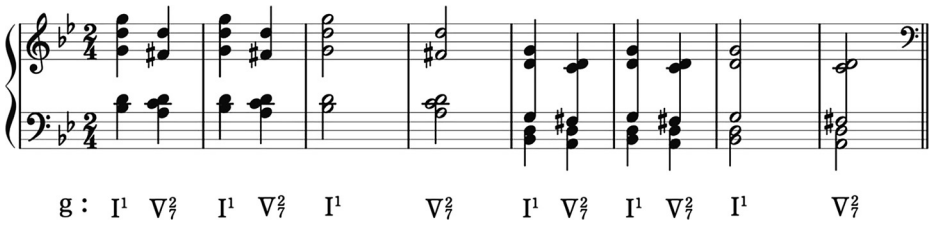
また、楽曲分析を行う際、音に焦点をあてて分析を行うため、スラーやスタッカート、強弱記号、速度記号などは楽譜には記載しない。

3．分析の結果

《即興曲》Op.5 の第２番の楽曲の転調は、g moll → d moll → B dur → g moll → G dur → g moll → B dur → g moll となっている。楽曲は g moll で始まり、楽曲全体は、属調の d moll、平行調の B dur、同主調の G dur の近親調に転調する形で構成されている。本研究では転調の中にある和声の変化を分析する。

楽曲の冒頭は、g moll である。譜例１は、１小節から８小節である。１小節の１拍目はＩで始まるが、基本形ではなく、第１転回形である。１小節の２拍目はV_7で、第２転回形である。１小節から８小節は、Ｉの第１転回形とV_7の第２転回形の繰り返しで構成される。５小節から８小

節は、１小節から４小節と同じ音価となっている。また、５小節から８小節において、Ｉの和音は同じ音の並びで、V_7は一番上の音と一番下の音は同じ音であるが、内声の音の並びを変化させている。１オクターヴ下で演奏する５小節から８小節は、１小節目から４小節目に比べて重厚な音の響きになる。



譜例１：１小節から８小節

譜例２は、９小節から 49 小節である。ここで分析する小節は、９小節から 46 小節である。

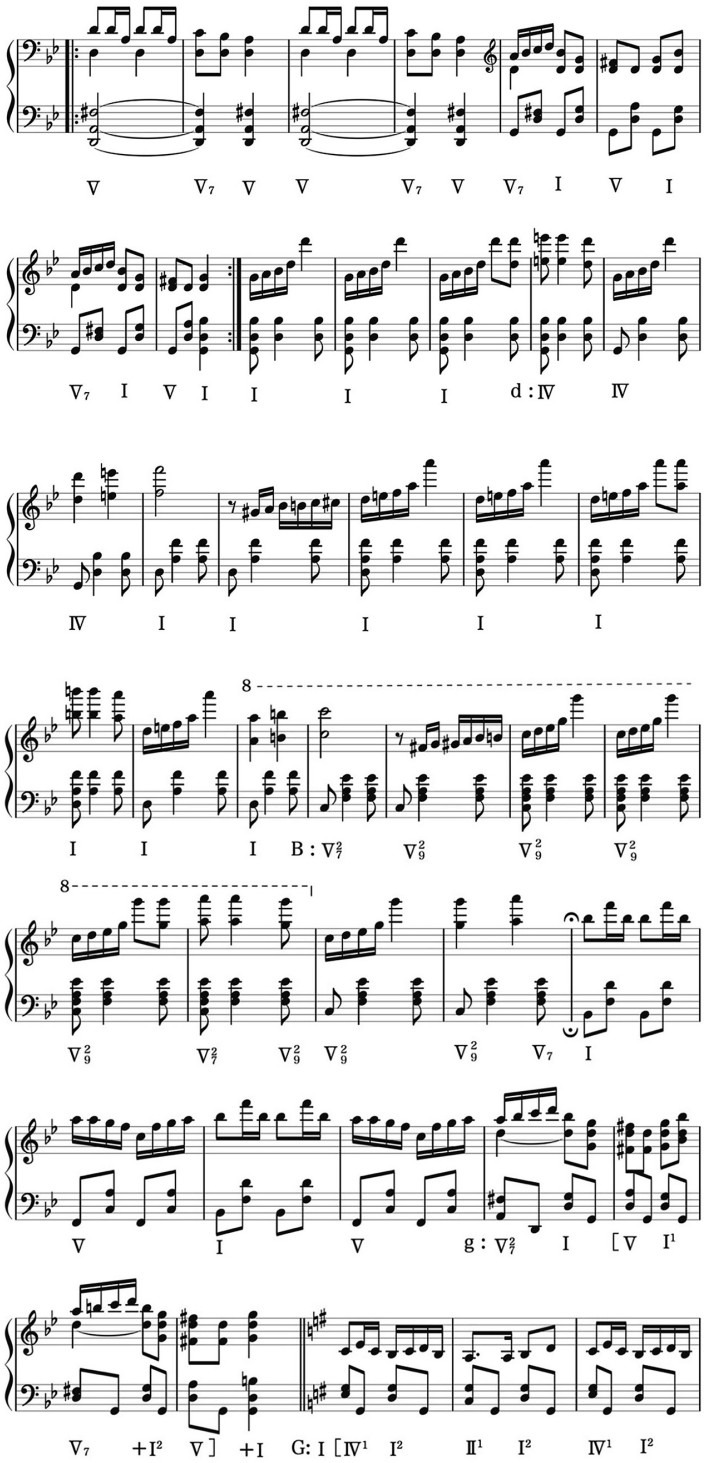
９小節から 19 小節までは g moll である。９小節から 16 小節は繰り返して演奏する構成である。９小節から 12 小節の４小節は、g moll のＶとV_7のみで構成されている。13 小節から 16 小節の１拍目までは、１拍目も２拍目も拍の頭が保続音の G2 になっている。そのため、和声は g moll のV_7―ＩとＶ―Ｉのパターンになる。２拍目でＩの和音に解決されている。

譜例２にある９小節から 16 小節は g moll であり、和声はＩとＶとV_7のみで構成されている。９小節から 12 小節はＶとV_7の基本形を使用し、13 小節から 16 小節は、各小節の１拍目を G2 の保続音にすることで、V_7とＶとＩを使用している。また、９小節から 16 小節は、Ｖにおいては基本形であり、V_7は基本形と第２転回形で構成されている。

速度記号は、譜例１の１小節から８小節は Lento、譜例２にある９小節から 46 小節は Vivace になっている。１小節から 16 小節の間に速度は変化するが、和声を見ると、ＩとＶとV_7の組み合わせを変化させることで、１小節から８小節、９小節から 12 小節、13 小節から 16 小節の３つのパターンで表現している。この３つのパターンがそれぞれ別のイメージの印象を与えている。１小節から８小節はＩの転回形とV_7の転回形を使用し、９小節から 12 小節と 13 小節から 16 小節はＩとＶとV_7を使用している。また、リズムが繰り返されている。１小節から４小節と５小節から８小節は同じリズムである。９小節から 10 小節と 11 小節から 12 小節は同じリズムである。13 小節から 14 小節と 15 小節から 16 小節は 14 小節の２拍目と 16 小節の２拍目のリズムは異なるが、それ以外は同じリズムである。和声とリズムを組み合わせることで、３つのパターンの印象を与えている。

譜例２の 17 小節から 19 小節は g moll のＩの連続である。20 小節から d moll に転調している。20 小節から 22 小節はⅣの和音が使用され、その後、31 小節までの８小節間、Ｉの和音が続く。28 小節の B5 と B6 は、ドリア調的にするために、B になっている。また、30 小節の２拍目

の B5 と B6 は、転位音になっている。

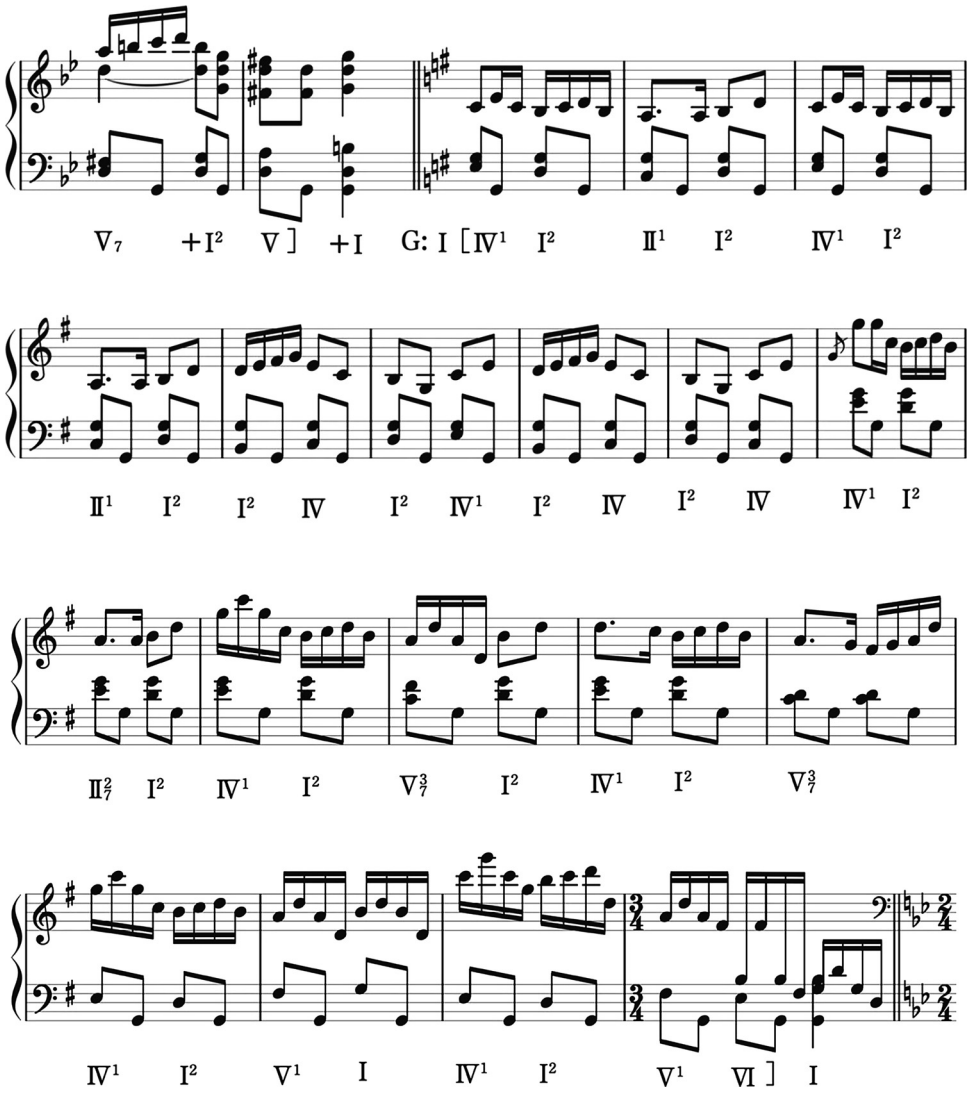


譜例２：９小節から 49 小節

譜例２の 31 小節から 42 小節は B dur に転調している。B dur は g moll の平行調である。31 小節から 38 小節までは、V と V_9 の第２転回形である。39 小節から 42 小節は I と V の繰り返しである。

43 小節から 46 小節は g moll の V と I で構成されている。43 小節の２拍目から 46 小節の１拍目までは、G2 が半拍遅れの保続音になっている。45 小節の２拍目と 46 小節の２拍目は、＋ I^2 と＋ I になっている。

譜例３は、45 小節から 64 小節である。



譜例３：45 小節から 64 小節

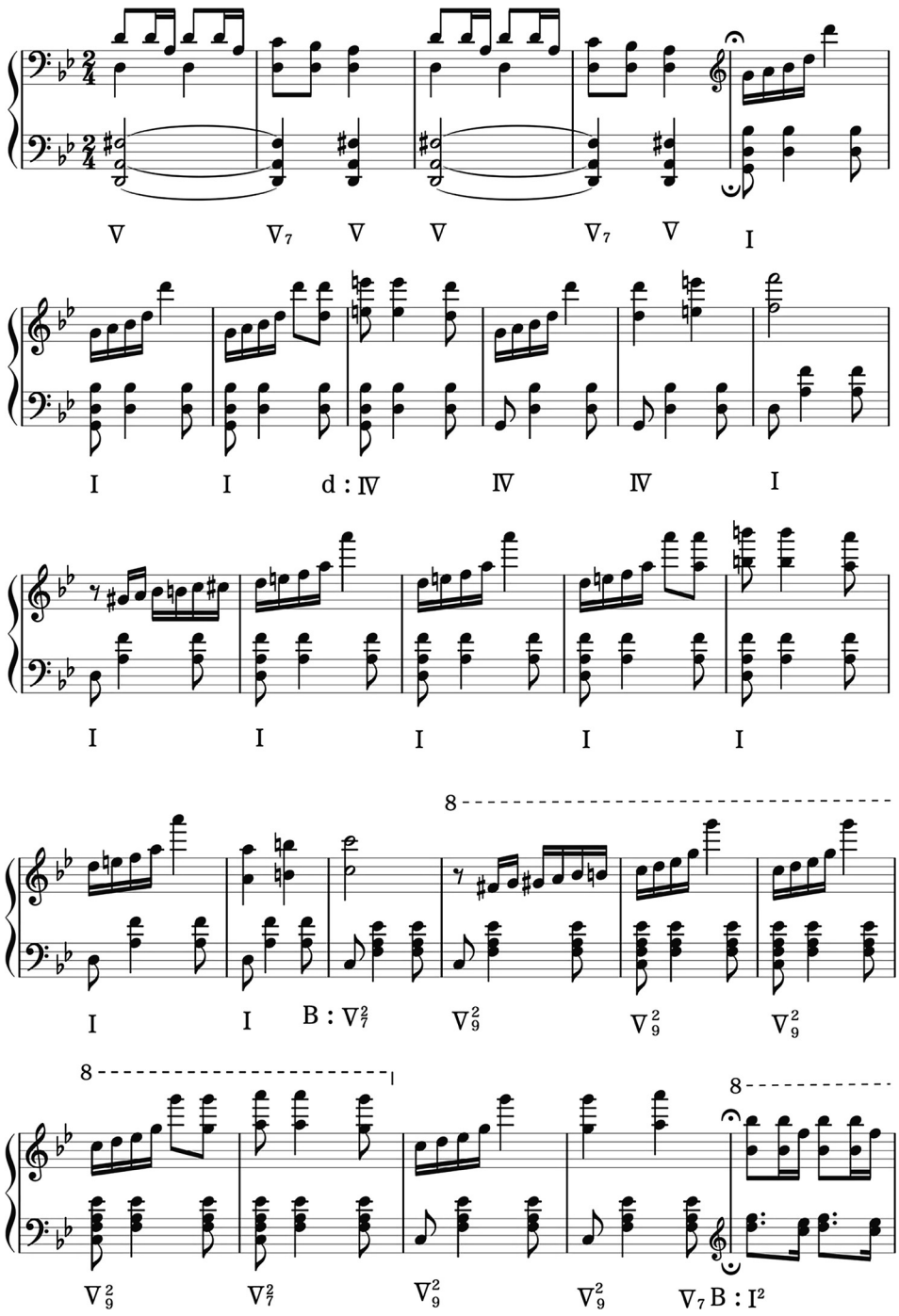
譜例３の47小節からは、G durになる。47小節から54小節のG2は、半拍遅れの保続音である。55小節から60小節のG3と61小節から64小節の２拍目のG2も、半拍遅れの保続音である。47小節のG durになった箇所から64小節の２拍目までの間にある、ヘ音記号の五線譜上にある音は、音の高さが変化しても、演奏する音が和音から１音のパターンと１音から１音へのパターンであっても、半拍遅れの保続音が続き、後の１音はG2である。また、47小節から64小節の２拍目まではG durのⅠの保続音上で和声が変化している。そのため、［　］で表記している。［　］の中の和声は、Ⅰの基本形とⅠの第２転回形、Ⅱの第１転回形、$Ⅱ_7$の第２転回形、Ⅳの基本形とⅣの第１転回形、Ⅴの第１転回形、$Ⅴ_7$の第３転回形、Ⅵの基本形である。

47小節から50小節は、47小節から48小節と49小節から50小節のⅣの第１転回形―Ⅰの第２転回形とⅡの第１転回形―Ⅰの第２転回形の繰り返しになっている。51小節から54小節は、Ⅰの第１転回形―Ⅳの基本形とⅠの第２転回形―Ⅳの基本形かⅣの第１転回形である。55小節から59小節は、２拍目にⅠの第２転回形がくる。60小節は$Ⅴ_7$の第３転回形のみである。61小節から63小節は２拍目にⅠの基本形かⅠの第２転回形がくる。64小節はⅤの第１転回形とⅥの基本形がくる。64小節は拍子が３拍子に変化し、３拍目はG durのⅠの基本形になる。

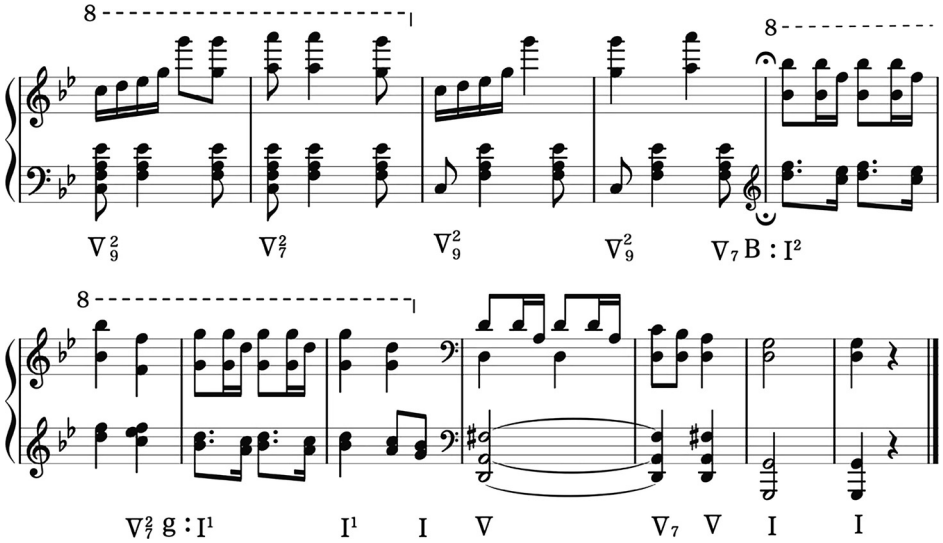
譜例４は、65小節から91小節までである。65小節から68小節は、９小節から12小節が再現されている。69小節からは13小節から16小節が再度現れるかと思われるが、この箇所は再現されず、17小節以降が再度演奏される。90小節までは、38小節までと同じ箇所が再現されている。

譜例５は、87小節から98小節である。91小節から92小節はB durで、93小節から98小節はg mollである。更に、95小節と96小節は９小節と10小節が再現され、最後はg mollの和音で楽曲が締めくくられている。２小節ずつのリズムが２回繰り返される９小節から12小節は、65小節から68小節にも再現されているが、95小節と96小節は１回のみ再現されている。91小節から94小節は音の響きが華やかであるが、95小節から最後までは対照的な低い音で終わる。

91小節から98小節はB durのⅠと$Ⅴ_7$、g mollのⅠとⅤと$Ⅴ_7$で構成されている。B durはⅠの第２転回形と$Ⅴ_7$の第２転回形、g mollはⅠの基本形と第１転回形、Ⅴの基本形と$Ⅴ_7$の基本形である。



譜例４：65 小節から 91 小節



譜例５：87 小節から 98 小節

４．分析結果のまとめ

シベリウス作曲の《即興曲》Op.5 の第２番の楽曲分析を行った結果、以下の特徴が明らかになった。

＜転調について＞

(1) 楽曲は g moll で始まり、g moll で終わっている。転調は、g moll → d moll → B dur → g moll → G dur → g moll → B dur → g moll となっている。

(2) 転調は、g moll に対して d moll は属調、B dur は平行調、G dur は同主調である。楽曲全体は近親調から構成されている。

＜和声の変化について＞

(1) 楽曲の g moll の箇所では、基本的にＩとＶとV_7で構成されている。和音の基本形や転回形を使用することで、同じ和音でも響きに変化を与えている。

(2) 楽曲の g moll の箇所では、＋Ｉと＋I^2がある。

(3) 楽曲の d moll の箇所では、ＩとⅣで構成されている。この箇所では、ＩもⅣも基本形である。

(4) 楽曲の B dur の箇所では、V_7の第２転回形とV_9の第２転回形である。また、ＩとＶで構成されている箇所もある。

(5) 楽曲の G dur の箇所では、半拍遅れの保続音がある。ＩとⅡとⅣとＶとV_7とⅥと、多様な

和声が使用されている。

＜リズムについて＞

（1）反復して使用する箇所が多く見られた。反復する場合も、４小節単位で繰り返す場合や２小節単位で繰り返す場合もある。

＜楽曲全体について＞

シベリウスが《即興曲》Op.5の第２番で使用しているコードはシンプルであるが、旋法を使用し、半拍遅れの保続音を使用することで独特の雰囲気を形作っている。このことで、シベリウスの音楽のおもしろさが伝わってくる。

５．今後の課題

本研究では、シベリウス作曲の《即興曲》Op.5の第２番の楽曲分析を行い、転調と和声の変化を明らかにした。今後は、《即興曲》Op.5の他の楽曲の分析も行い、各曲の特徴とシベリウスの作曲法について、更に検討していきたい。

参考文献

・神部智，2008．ジャン・シベリウスの《交響曲第３番》における創作概念と表現手法．
音楽表現学 Vol.6　日本音楽表現学会　pp.17-28.
・Jean Sibelius Op.5 KUSSIM IMPROMPTUA edition FAZER